沈黙の四十年

引き揚げ女性強制中絶の記録

武田繁太郎

中央公論社

沈黙の四十年

引き揚げ女性強制中絶の記録

武田繁太郎

中央公論社

沈黙の四十年
引き揚げ女性強制中絶の記録
定価一〇〇〇円
昭和六十年七月十日印刷
昭和六十年七月二十日発行
著者　武田繁太郎
発行者　嶋中鵬二
印刷所　三晃印刷
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
©一九八五　検印廃止
ISBN4-12-001411-8

目次

埠頭にて　5
東京からの呼び出し　8
博多港に検診所開設　44
検診、始まる　58
非合法の中絶　82
被害女性たち　117
二日市保養所　165
戦後四十年の流れの中に　183

装幀　倉橋三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

沈黙の四十年

引き揚げ女性強制中絶の記録

埠頭にて

三十九年ぶりであった。

さっきから、吉村速男は博多港の中央埠頭の突端に立って、港の内外をあかずながめていた。長い埠頭の岸壁には、貨物船やコンテナー船がずらりとならび、積み荷の揚げおろしで港は活気づいている。港内を往き交うランチの群れが、あちこちで鋭い汽笛の音をひびかせていた。

よく晴れた秋の日の午下りであった。玄界灘からよせてくるそよ風が、吉村の頬にここちよい。海は凪いでいた。

彼は敗戦の年の秋から二年ちかく、この埠頭にかよいつづけた。その委細については、いままで関係者以外だれにもうちあけたことはない。家族にも語らず、すべて彼ひとりの胸に納めてきた。これからも、生涯沈黙を守っていくだろう。

だが、いまこうして埠頭に立ってみると、往時のさまざまな思い出がよみがえってきて、懐旧の情が吉村の胸を浸してきた。

吉村は現在関東地方にあるO市立病院の院長を務めている。産婦人科出身の彼が所属している

「全日本母性保護医協会」が、今年の年次大会を福岡でひらいたので、彼もひさしぶりに福岡にやってきた。大会で彼は「思春期の妊娠問題」と題する特別講演を行なった。

来年の三月、吉村はO病院長を退任し、現役を去ることにしていた。もう滅多に福岡を訪ねることもあるまい。そう思って、大会がおわってから、博多港まで足をのばしてみたのである。この港も、これで見納めになるかも知れなかった。

吉村は今年六十八歳になっていた。二十代の当時から痩身で、細面に金縁の眼鏡をかけた顔はちょっと神経質そうにみえたが、身体はいまでもいたって元気である。動作もキビキビしていたし、年よりもずっと若くみられた。まだまだ引退は早いと周囲のものにも言われたが、そうして惜しまれるうちが花だと、彼は後進に道を譲る決心をした。余生は年来のテーマである「妊娠問題」の研究に親しむつもりであった。

吉村はゆったりとした足どりで埠頭をひとめぐりした。三十九年の歳月は、彼の記憶にある港のたたずまいを一変させていた。古びた倉庫が雑然とならんでいた当時の面影はない。埠頭の入口をまたいで「福岡都市高速一号線」も建設され、博多港はすっかり近代的な港に生れかわっていた。どこか見知らぬ港にでも迷いこんだ思いであった。

吉村が復員してからはじめて博多港をみにきたときは、敗戦の混乱状態の真っ只中にあった。そのころの博多港の模様を『博多引揚援護局局史』はこう伝えていた。

「夏から秋にかけて、アメリカ軍の進駐、暴風雨の襲来などが重なり、当時の埠頭は軍需物資が腐敗山積し、極めて非衛生的であった。朝鮮人残留者は常に一万五千人に及び、彼らの帰国の目

途漠然として、その不満は迫りくる寒気とともに日々昂じ、埠頭入口付近に突然出現した闇市に流言乱れとび、遂に竹槍を構うに至り、不穏の空気は極点に達した」

東京からの呼び出し

敗戦からまだ三週間とはたっていない九月の上旬、残暑のきびしい日であった。

吉村速男は九州大学医学部産婦人科の副手を務めていたが、上司である岩田良祐助教授から、突然上京する旨を知らされた。だが、「吉村君。明日、東京へいくことになった」と言われただけである。それ以上の話は、助教授は口にしなかった。

吉村も黙ってうなずいた。なぜ急に上京するのか、と問い質すことが憚られるような、なにかきびしいものが、助教授の表情から窺えたからである。

翌日、吉村が助教授室に呼ばれると、岩田助教授は、国防色の国民服にゲートルを巻き、大きくふくらんだ雑嚢をさげて、すでに旅支度をととのえていた。

吉村副手は、戦争中軍医として陸軍に召集されていたが、内地勤務だったため、戦争がおわると一週間ほどで復員して、母校の医局に帰局したばかりであった。着るものに不自由していた吉村は、白い診察着の下に軍医時代の将校服を着こんでいた。頭もまだ丸刈りのままであった。

「先生。東京までたいへんですね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

吉村が声をかけると、

「うむ。まあ、仕方がない」

岩田助教授はかるくうなずいたが、あまり機嫌のよさそうな顔ではなかった。

吉村の言うとおり、九州大学のある福岡から東京までは、たいへんな汽車の旅であった。戦争末期アメリカ軍の空襲をうけて、全国の鉄道が各地で破壊され、列車の運行は極度に制限されていた。一枚の切符を手にいれるために、乗客たちは駅の窓口に徹夜で長蛇の列をつくっていた。

長距離列車も、特急、急行ともに廃止されて、すべて各駅停車の「鈍行」になっていた。東京行きの直通列車でも、えんえん四、五十時間はかかっただろう。

吉村も、召集解除で姫路の部隊から福岡へ帰るときは、ひどい苦労をした。どの列車も、復員兵と闇の買い出し客などで超満員であった。車内は文字どおり立錐の余地もなかった。驚いたことに、網棚の荷物のうえにも、座席の背もたれのうえにまでも、乗客が群らがっていた。熱気と人いきれで車内は息がつまりそうであった。

吉村は、立ちどおしのまま、姫路から岡山、広島、門司と近距離列車を乗りつぎ、丸一日かかって博多にたどりついた。若い吉村もさすがに疲れはて、博多駅のフォームに降りたときには、しばらくは両脚が棒のように突っぱって動かなかった。

その博多駅から、岩田助教授は、はるばる東京までかけていくというのである。東京行きの直通列車に乗車できればいい。運悪く吉村のように、近距離列車を乗りついでいくことになれば、この暑いさなか、東京まで何時間かかるか見当もつかなかった。

それにしても、と吉村は首をかしげた。岩田助教授は、なぜそれほど苦労してまで上京しなければならないのか。よほど差し迫った用件ができたというのか。

「それじゃ、いってくる。一週間ほどで帰る予定だが、留守中、わたしが上京していることは、医局の連中には黙っていてほしい。頼んだよ」

そう言い残すと、岩田助教授は助教授室をでていった。

「お気をつけて」

吉村は、重そうな雑嚢をさげて、足早にたち去っていく岩田助教授の長身の後ろ姿を見送りながら、助教授の上京が公用なのか私用なのかも知らされてはいなかった。

医局内の庶務的な仕事は、医局長が受け持っていた。岩田助教授は、医局長に一週間の休暇を申しでていたが、その休暇が東京にでるためのものであるとは、この医局長にも話してはいなかった。

医局長のポストは、若手の助手や副手たちが一年交替で分担することになっていたが、このときは、倉本秀夫という医学部の大学院生が臨時に医局長を勤めていた。戦争の激化に伴い、助手、副手連中が根こそぎ軍医にとられていたため、人員不足で大学院の学生まで医局にかりだされていたのである。

吉村副手も、昭和十六年に医学部を卒業して医局にはいり、約二年間勤務したが、昭和十八年に召集された。戦争の末期には、産婦人科では、教授が退官して空席になり、医局に残っているのは、召集を免れていた助教授と講師の七名にすぎなくなっていた。

八月下旬、復員した吉村が二年ぶりに医局に復帰したときには、応召した医局員はまだ一人も戻ってはいなかったが、その後、吉村と同様内地の部隊に勤務していた連中が、あいついで復員してきて、助手、副手の数はようやく六、七名にふえていた。

上京したはずの岩田助教授から、吉村の許にはなんの連絡もなかった。途中でなにかあったとは考えられないが、助教授は東京でなにをしているのか、吉村は内心気がかりになっていた。

「助教授、どこへいったんだ？」

と吉村にたずねる医局員もいた。

「さあ、知らんな。実家に急用でもできて、帰省されたんじゃないのか」

吉村は適当に答えておいた。岩田助教授は佐賀県の出身であった。

吉村の先輩でも、医局にはいってすぐ応召したものは、産婦人科医としての経験にとぼしかった。その点、医局に二年間勤めていた吉村は、臨床経験の年数からいえば、若手の助手、副手のなかでは、最古参の医局員になっていた。だから、岩田助教授も吉村に東京行きをうちあけていったのであろう。あと一年も勤めれば、吉村は副手から助手に昇格することが見込まれていた。

岩田助教授は、予定どおり一週間後に東京から帰ってきた。一週間といっても、往復の汽車の旅に時間をとられるので、東京の滞在は正味二日か三日にすぎなかっただろう。吉村は助教授室に呼ばれた。この日も、三十度を超す蒸し暑い残暑がつづいていた。

「お帰りなさい。お疲れだったでしょう」

吉村は労(ねぎら)いの言葉をかけたが、岩田助教授は、あつくるしい国民服の上衣を脱ぎ捨て、くたび

れきった顔をしていた。
「留守中、変ったことはなかったかね？」
「べつにありませんでした。先生。東京はどうでした？」
「どうもこうもない。東京まで、鉄道沿線の目ぼしい街は、跡かたもなくなっていた。あれを焦土というんだろう。米軍はよくもあれだけ徹底的に焼き尽したものだ。この福岡もひどくやられたが、東京はもっとひどい。銀座、新橋、虎ノ門辺をまわってみたが、みわたすかぎり廃墟の街になっていた。新橋の駅前に大きな闇市ができていて、人の波であふれていた。みんな腹をへらして、闇市で売っている揚げ饅頭や鰯の塩焼きなどにむしゃぶりついていた。目をぎらぎらひからせて、まるで飢えたケモノだ。日本人は餓鬼道に堕ちてしまったな。戦争に敗けた国の惨めさを、あらためて思い知らされたよ」
「先生。広島の街はどうごらんになりましたか」
「汽車の窓からみただけで、爆心地の様子はわからん。しかし、焼夷弾でやられた街とはちがって、どこか鬼気迫るものを感じさせられたな」
吉村も、復員の途次、駅のホームからかいまみた広島の街を思いだしていた。原爆で一瞬のまに街は潰滅し、二十万人もの市民の生命が奪われたという。今後七十年間、広島には一本の草木も生えないだろうと新聞は伝えていた。死をまぬがれた市民たちは、これから先き、この不毛の地でどのようにして生きていくのか、吉村には想像もできなかった。
「それで、先生。東京でのご用件は予定どおりすみましたか」

「うむ。そのことだが」
岩田助教授は、あらたまった面持ちで言った。
「これは、いままで君にも話さなかったことだが、先日、東京の厚生省から九大産婦人科のわたしの許に内密の通報があったんだ」
「厚生省から？」
吉村はおうむ返しにききかえしていた。
「そうだ。大至急、厚生省に出頭せよというんだ。委細は、わたしが厚生省にいってから知らせるという。どうもわけのわからん話だが、ともかく、内密にということなので、医局の君たちにも黙って、上京したのだ」
「そういうことだったんですか」
吉村には、はじめて助教授の上京のいきさつがのみこめた。
国立大学は文部省の管轄であるが、医療機関である附属病院を持っている医学部は、厚生省の管轄もうけていた。こんどの場合、本来なら医局の責任者である教授が呼ばれるところだが、教授が退官していたため、岩田助教授が呼びだされたのである。
「いったい、厚生省でどんな話があったんですか」
「うむ――」
岩田助教授はうなずいたが、そのまま、言い淀むように、しばらく言葉をとぎらせた。こころなしか表情がこわばっていた。

「吉村君。えらいことを引き受けさせられてきた」
助教授は投げだすように言った。いっそう硬い表情になっていた。まだどんな話かわからぬが、吉村も表情をひきしめて、助教授のつぎの言葉を待った。
「まあ、順序だてて話そう」
助教授は、さげてきた雑嚢から、駱駝の絵のついたアメリカ製のタバコを二箱とりだした。
「新橋の闇市で買ってきた。妙な東京土産だが、君にもあげよう」
助教授は、一箱を吉村に与え、自分も一本ぬきとって火をつけた。アメリカ・タバコは福岡の闇市にもでまわっているらしいが、吉村はまだ買ったことがない。いがらっぽい配給のタバコを常用していた彼は、甘い薫りの紫煙を胸いっぱいに吸いこんだ。助教授も、タバコをくゆらしながら話しだした。
「敗戦で、外地に在留していた日本人が、大挙して帰国してくる。満洲、朝鮮方面の在留邦人は、朝鮮の釜山港から博多港に引き揚げてくる。博多港は九州地方での引き揚げの主要基地になるそうだ」
「そういえば、あれはたしか八月の二十二日でしたが、朝鮮からの引き揚げ船の第一陣が、博多港に入港したそうです」
「そうか。もう引き揚げ者が帰国しているのか。敗戦国民になって、みんな一日も早く日本に帰りたいんだ。政府筋にはいった情報によると、満洲や北朝鮮では、ソ連の極東軍が攻めこんできて、在留邦人はひどい目にあっているらしい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.